

◆◆◆ 静止気象衛星「ひまわり6号」観測真夜中に小休止

— 秋の「食」運用近づく —

静止気象衛星「ひまわり6号」は平成17年6月の運用開始以来、昼夜を分かたず30分毎に宇宙から地球の観測データを我々に届けており、我が国はもとより世界各国の気象業務に大きな貢献をしています。気象衛星運用者にとって途絶えることのない観測は、最も大きな責務のひとつであり、「ひまわり」を運用している気象庁を始めとする各気象衛星の運用者は衛星の状態を24時間体制で監視し、少しでも観測が欠けることのないよう常に細心の努力を払っています。このようななかで、各静止気象衛星が揃って観測の一部を休止する時期が年に2回あります。

静止気象衛星は、地球の自転速度と同一の軌道速度を保つことのできる赤道上空の高度36,000kmに位置し、常に赤道上空の1点（「ひまわり6号」では、東経140度上）から撮像用カメラにより地球の観測を行っています。ところで、春分の日と秋分の日前後には、衛星—地球の赤道面—太陽が一直線上に並び、衛星が地球の影に入る（「衛星食」）深夜に衛星からカメラを地球に向けるとその先の方向に位置する太陽もカメラの視野に入ってしまいます。静止気象衛星に搭載されているカメラは非常に高感度なものであり、地球からの放射に比べて格段に強い太陽からの光線等が入るとカメラが損傷を受けてしまいます。これを避けるために、この時期深夜の観測が中止されます。これは、衛星の不具合ではなく、赤道上空を地球の自転に同期して動いている静止気象衛星に課せられた宿命的な対応といえるでしょう。

この秋の一部観測の中止（食運用）は、8月29日から10月19日の午後10時30分頃から午前0時15分頃の間に変更されています（但し、この間の一部の観測が対象）。いわば静止気象衛星の機能保持のために避けられない小休止であり、毎日、ひまわりの観測データを利用している我々として、宇宙空間の厳しい環境下で絶えず頑張っている衛星に思いをはせる機会としてみては如何でしょうか。なお、食運用は衛星の軌道状況が微妙に関係するので、そのスケジュールは翌週のもの気象庁のホームページ等逐次公表されます。